

制限的用法の関係詞と先行詞の定冠詞

How to Use the Definite Article for the Antecedent Qualified
[Post-modified] by the Relative Clause of Restrictive Use

坂 井 孝 彦

目 次

まえがき

1. 英語の流れの後方 [=下流側] から冠詞の使い方を考える立場
2. 英語の流れの前方 [=上流側] から冠詞の使い方を考える立場
—post-modifier [qualifier] による情報追加
3. 定名詞句表現と不定名詞句表現
4. THE：辞書における説明例—限定の語句を伴う場合
5. THE：大学教科書における説明例—限定の語句を伴う場合
6. まとめ

資料

参考文献

まえがき

「英文を読み解く」といういわば受身の立場にたつ場合の英語学習者は、
post-modifier [qualifier]が付くとその名詞は限定されるからtheがついてい

る』というような観察者や分析者になっている。さらに「読み進む」ようになると、「post-modifierが付いてもその名詞にtheがついていなくてaがついている場合がある」というような事実にも気がつく。「英語を書く，対話する」という英語使用者の立場にもたつようになると「theではじめる名詞にはpost-modifierを追加して意味を限定させる必要があるのだ」と意識し，さらに「aではじめる名詞へのpost-modifierの追加は，言葉の紡ぎだしてゆく動的プロセスに依存するのだ，という意識をもつようになる。

マーク・ピーターセン先生はつぎのように示唆された：「名詞に a や theがつく，のではなくて，先行して意味的なカテゴリーを決めるのは a やtheであり，そのカテゴリーに適切な名詞が選ばれるのはその次である。冠詞は名詞につくアクセサリーではないし英語は後から考えるものではない」

このご示唆を意識する英語使用者は，受け手側との共通理解領域に属さない場合の初出の定名詞表現を使う発話・発言の場合には，post-modifierの追加（情報の追加・建増・添加・付加）を義務的に行うようになる。これによって受け手側は指示特定された意味対象を認知できるようになるからである。不定名詞表現を使う発話・発言の場合には，post-modifierの追加は必ずしも義務的ではない，とも意識するようになる。

換言すれば，英語冠詞の世界を理解するには，①英文の標本を集めてこれを分析する分析研究者の立場，と②「人」対「人」の間で言葉を紡ぎ出してゆくという動的プロセスのなかで英語を使おうとする英語使用者の立場，という異なる立場があって，この「立場の違い」から生ずる意識の持ち方が，「つけてある [使われている]，つけてない [使われていない]」→「つける，つけない」→「post-modifierの追加は義務的である，義務的ではない」のような叙述表現の差異を生じさせる。「ついている，ついていない」・「つける，つけない」の立場では，英語を後ろから考えている英語分析者側の表現である。「情報の追加は義務的である，義務的ではな

い」の立場では、英語を前方から英語の流れにそって考えている英語使用者側の表現である。

伝統的な参考書・辞書・学術書や英米著名言語学者の著書・辞書などの翻訳・解説書などには、「つく、つかない」・「つける、つけない」式の説明記述が多い。これに対して英語使用側の立場にあるたとえば実務者の書物・websitesの報告記述などには、マーク・ピーターセン先生流のご教示をフォローし解明しようとの姿が垣間見える。

定冠詞の用法説明において、前方照応 [= 文脈の上流側を照応する, 遡及指示, anaphoric reference, anaphora. “ana” = up], 後方照応 [= 文脈の下流側を照応する, 進行指示, cataphoric reference, cataphora. “cata” = down] というような術語が英和辞典などにも見られるようになってきている。

(cf. endophora=言語テキスト内照応, exophora=言語外の事象を照応, 外界照応)

たとえば、ジーニアス英和大辞典は、[前方照応的；前述の名詞を指して], [後方照応的；説明の語句が付いて限定される名詞の前で] の術語が使われている。

冠詞の用法についてこの二つの術語が使われる場合において、この二つの術語が包含する意味内容は、必ずしも対称的になっていない、ことを指摘する：

〈前方照応〉のほうは、談話テキスト内の特定名詞語句が定冠詞による特定者指示の意味対象となるような場合を想定している。これに対して〈後方照応〉のほうは、談話テキスト内の特定名詞語句が定冠詞による特定者指示の意味対象となるような場合をほとんど想定していない。例外的に、サスペンス小説における主人公の正体を最初から明かさないようにする場合などを想定する程度である。では、〈後方照応〉はどんな場合を想定しているのか：post-modifierを指してこれを〈後方照応〉と称している。

一方、pre-modifierを指して〈前方照応〉と想定する場合は一部の場合に限られている。

換言すれば、定冠詞の用法説明において使われている〈前方照応〉、〈後方照応〉という二つの術語には、その指し示す意味内容において、その術語の文字面から想定されるような対称性は存在せず、むしろ差異のほうが顕著である、という事実に注目しておきたい。

〈後方照応〉という術語を使って「後方照応によって先行名詞が限定されtheがつく」というの主旨の説明記述をしても、「英語のflowを後ろ [= 下流側] から見ている」説明記述であることには変りはない。

1. 英語の流れ [=flow] の後方 [=下流側] から見て冠詞の使い方を考える立場

以下、冠詞の使い方をどちらかと言えば、英語の流れ [=flow] の後ろから [=下流側から上流側を見て] 考えている記述を紹介する：

- (1) 金谷 憲 (2002 : 21) : theの用法. 形容詞の働きをする句や節が名詞につく場合.

(1a) Who is *the* girl in the car over there?

- (2) 井上義昌 (1985 : 137) : 定冠詞の用法. 語・句・節で限定された名詞に.

(2a) *the* present king

(2b) *the* man standing by the door

(2c) Is this *the* boy who came yesterday?

- (3) 鈴木寛次 (2000 : 155) : 定冠詞の用法. 修飾語句が名詞に付く場合.

(3a) This is *the* photograph which he took yesterday.

- (4) 中原道喜 (1997 : 210) 一定冠詞の用法 : 限定語句のつく名詞. 関係詞節・最上級その他の限定修飾句によって特定のものが示される場合.

(4a) He is the only friend that I have.

(4b) He is the tallest boy in the class.

(4c) The capital of England is London.

註 : 関係詞節その他の修飾句がついても, その名詞が特定のものに限定され定冠詞が用いられるとは限らない.

(4d-1) The boy who came here this morning is my nephew. (特定者)

(4d-2) A boy who is not diligent is unlikely to succeed. (不特定者)

(4e-1) I met the teacher in charge of our class. [担任の先生] (特定者)

(4e-1) I met a teacher of our school. [この学校の先生] (不特定者)

- (5) トムソン, A. J. / マーティネット, A. V. 江川泰一郎 訳 (1997 : 6) : 定冠詞theの用法 (The definite article is used) : 句または節が付いて特定化された名詞の前 (Before a noun made definite by the addition of a phrase or clause) :

(5a) the girl in blue

(5b) the man with the banner

(5c) the boy that I met

(5d) the place I met him

訳者注 : 句や節で修飾されると, 自動的にtheが必要になるわけではない. 例えば次の第1例では, 学校の生徒は大勢いるから, その中の一人を指す場合にはa student (of our school) となる.

(5e) He is a student of our school.

(5f) She bought a doll with blue eyes.

(5g) We want a man who can speak English.

- (6) 熊山晶久 (1985 : 237) : 形容詞節が、前にくる名詞を修飾すると、その名詞は「形容詞節によって叙述された範囲内の意味を持つ名詞」となり、被修飾語の名詞は限定された意味を持ちますから、特殊化します。その特殊性を表わすためにtheが必要になります。

(6a) This is a book that I bought yesterday. (2冊かそれ以上買ったうちの1冊)

(6b) This is the book that I bought yesterday. (買った本は1冊だけで、これがその本です)

- (7) Roger Berry (1993 : 30) : The definite article is also used with nouns when it is the phrase or clause following the noun (rather than a previous word or the general situation) which indicates which thing the noun refers to. Nouns with phrases or clauses after them are said to be qualified.

《拙訳：定冠詞の用法の一：特定者指示の意味対象が〈談話テキスト内の特定名詞語句〉あるいは〈目撃状況的場面文脈内の特定存在〉ではなくて、〈名詞に後続する句や節〉こそが、特定者指示の意味対象となる場合がある。この場合においても、定冠詞が使われる。当該名詞に句や節が後続する場合、その名詞は「修飾されている＝qualified」と言う》

- ・ by prepositional phrases [=前置詞句] :

(7a-1) The only way to learn *the* price of something is to pay for it.

(7a-2) *The* reason for this selection is obvious.

(7a-3) ...on the basis of *the* data in Table 7.1.

(7a-4) Of course he knew *the* answer to that one.

- ・ by relative clauses [=関係詞節] :

(7b-1) What about *the* argument that reality isn't like that?

(7b-2) ...*the* amount it cost to build the house.

(7b-3) ...to get back to *the* hotel where he was staying.

(7b-4) ...*the* success which has been achieved.

- by infinitives or participles [=不定詞, 分詞] :

(7c-1) Power at work is *the* power to get decisions implemented.

(7c-2) ...*the* interest paid on overdrafts and credit cards.

- by apposition (using one noun group to qualify another) [=同格]

(7d-1) And he wrote a book with *the* title "The Summing Up".

Note that when uncount nouns referring to qualities or feelings are used with *the*, it is usually because they are qualified.

(7e-1) I tried to concentrate on *the beauty of the scenery*.

(7e-2) I share *the anger that many of you must feel*.

(拙訳) 注目してほしいこと: 「特質 *qualities*」や「...という情感 *feelings*」を特定者指示の意味対象とする量状名詞 [*beauty, anger*] は、通常は、後置修飾形の定冠詞形名詞句となる。

Roger Berryはこの本のなかのp22-p34において、Specific uses of the definite articles のタイトルの下に、定冠詞の用法を説明している。上記の引用部分は、p30においてNouns with qualificationの見出しのもとに説明されている内容である。この説明においては「qualifyされると先行する名詞に*the*をつける」と言い切っているわけではないように読める。しかし、そのような意味であると解釈してしまう読者もいるかもしれない。

(8) 田部 (1996: 132-138) から

関係詞とその先行詞の間に生じる冠詞の問題についていくつかの仮説をたてて複数の例文についてその検証結果を紹介している。

仮説1: 関係詞節が先行詞を限定しているので、その先行詞は*the*を前置する。「関係詞節は本来的に意味の添加による特定化であり、情報

量の付加であるから、意味の特定化を進める便利な方法ということが言える」とのコメントがある。

仮説2：先行詞にone（「一つ」）の意味を強調したいときは不定冠詞が優先使用される，とのコメントがあるが，かなり誤解をうけやすい説明であるように思われる。

(9) 斎藤（1953：13-15）

定冠詞のtheは，物を指摘して言うその本来の意味において，その名指したものを“特定”するのであって，その名指した特定物が聞き手にもわかっている場合に使う。話し手がどの“特定物”を指して言っているのか，聞き手にもわかる場合は三つある：

規則① 既出の名（Names previously mentioned）

規則② 前後の文で確定された名（Names defined by the context）

規則③ 日常熟知の物の名（Names of familiar objects）。

規則②：定冠詞は，たとえ，初出の名であっても，これに添えた修飾語句で確定されて，何らかの特定物を指す場合に使う。

(9a1) The country in which we live.

(9a2) The highest mountain in Japan.

(9a3) The house I live in....

修飾語句が付いても，必ずしもその名詞が確定されるわけではない。

(9b1) He is the principle of our school.

(9b2) He is a student of our school.

(10) 江川（1991：117-118）

修飾語句を伴う名詞と定冠詞—theがつく場合とつかない場合：名詞

に修飾語句が伴うと、その名詞が特定化されてtheをつけることが多いが、特定化されないこともある。

(10a1) Mary wanted the doll with blue eyes. (青い目の人形)

(10a2) Mary wanted a doll with blue eyes. (同上)

(10a1) はいくつかある人形の特定の一つを指し、(10a2) は青い目の人形一般の中の不定の一つを指している。

(10b1) My parents went to look over the house that they're thinking of buying.

(10b2) My parents are looking for a house that is convenient for all transportation.

考察：(10a1) は、「たとえば《茶色い目のほうの人形》」が欲しいのではなくて「《青い目の方の人形》」が欲しかった、の意であると解したい。一つの全体を構成する「人形」の部分要素として「いろいろな色の人形」を意識して、そのうちの「青い目の方の人形」を一つだけ、特定している、という場合である。

(10a2) は、世の中に存在する多数の「青い目の人形」のうちの任意のどれかが欲しかった、という意味である、と解したい。）

(10b1) と (10b2) にも同じようなことが言える。詳細は次節以降に述べる。

2. 英文の流れ [=flow] の前方 [=上流側] から見て冠詞の使い方を考える立場—post-modifierによる情報追加

theによる特定者指示の意味対象が場面文脈の特定存在として、あるいは談話テキスト内の特定名詞語句として、受信側に認知され得ない（受信

側には未知の) 初出の定名詞表現を発話する場合は、義務的にpost-modifierを追加する。これによって、その定名詞句表現は、ひとつの全体を構成するある一つのカテゴリーに決まる特定の部分要素としてtheによる特定者指示の意味対象となる。あるいは、その定名詞句表現は、ひとつの上位概念を形成する下位のある一つのカテゴリーに決まる特定種類概念としてtheによる特定者指示の意味対象となる。

〈情報の追加〉＝〈post-modifierの追加〉には、次のような手段がある：

- ① 関係詞節（制限用法の関係詞節＝形容詞節）を追加する。
- ② 形容詞句（前置詞句のうちで形容詞のような働きをする句）を追加する。
- ③ 不定詞（形容詞のような働きをする不定詞）を追加する。
- ④ 分詞（形容詞のような働きをする分詞）を追加する。
- ⑤ 同格の名詞を追加する。

（例：He wrote a book with the title "I am a cat."）

以下に、デニス＝キーン・松浪（1995：31－34）の提示した例文およびその英文説明内容（拙ない抄訳つき）を紹介しこの内容を考察してみたい。

(1a1) I am studying history.

(1a2) I am studying the history of English Literature.

(1a3) I am writing a history of English Literature.

(1a4) I am writing a history of the English Literature of the eighteenth century.

(1a1) の “history” は量状抽象名詞表現. “a history” は 〈a unit＝まとまってひとつの全体を構成している一定量〉を表わす.

(1a2) の “the history of English Literature” は, 例えば “the history of French Literature” と対照して使われる. ひとつの全体を構成するあるひとつの部分要素だけを対照的に指示して特定化する. 別言すれば, ひとつの全体を構成する [A, B, C, D, ...] という集合のなかからAだけを対照的に指示して特定化する. ここに, A = “the history of English Literature”, B = “the history of French Literature”, C = “the history of Japanese Literature” ,... である)

(1a3) の “a history of English Literature” は, “other histories of English Literature” と対照して使われている. 同質集合 [A1, A2, A3, A4, ...] 中の任意のひとつだけを選別する. ここに, A1 = “a history of English Literature (1)”, A2 = “a history of English Literature (2)”, A3 = “a history of English Literature (3)” ,...である.

(1a4) の “the English Literature of the eighteenth century” は, “of the eighteenth century” という情報を追加した定名詞句表現である. “the eighteenth century” はそれ自体でonly one を表している定名詞句表現である.

(1b1) You should drink medicine which is good for you.

(1b2) You should drink the medicine which is good for you.

(1b1) のpost-modifierは薬に対するa commentである: “which is good for you” は, “because it is good for you” ほどの意味である. “medicine

which is good for you” は，specific medicineではない。

(1b2) では「〈体に良いほうの薬〉だけを飲みなさい，〈体に良くないほうの薬〉はだめです」と言っている．ひとつの全体を構成するある部分要素だけを対照的に指示して特定化している．別言すれば，ひとつの全体を構成する [A, B] という集合からAだけを対照的に指示して特定している．ここに，A = 〈体に良いほう薬〉，B = 〈体に良くないほうの薬〉である．)

つぎに 西田 (2000 : 111－116) から以下のような例文を紹介する．

(2a1) (＊) Have you talked to <the people> yet?

(受信側の反応：「どの人のことかわからないね」)

(2a2) (○) Have you talked to <the people you said you would>?

(受信側の反応：「あ～，あの人とあの人のことか」)

(2b1) (○) I had <ϕ curry> for lunch. (ϕ = 無冠詞，curryは量状名詞．)

(2b2) (＊) I had <the curry> for lunch.

(受信側の反応：「どのカレーのことかわからないね」)

(2b3) (○) I had <the curry that you had cooked for me>.

共通の理解に関する境界線上にある初出の定名詞表現について，それがひょっとしたら認知され得る場合，追加のpost-modifierによる「定名詞句表現」とすることによって，受信側の認知度をあげることができる：

A : Where are you headed?

B : The <airport at Narita>.

〈the airport〉の形でもどの空港であるのか受信側は認知できるかもしれないが 〈The airport at Narita〉 とすれば，完全に認知され得る．)

つぎの例文は、板垣（2000：website資料）に対して、最後の一行を補足したものである。

(3a) A: You know, I tried calling you several times last week. I wanted to warn you about the flood.

B: The flood? What flood?

A: The flood caused by a heavy rainfall on March 27-28.

つぎに、DIXIE=らんど（1996：26-28）から、その説明要旨と例文を紹介する：

相手には未知で初出のものに使うthe：発信側が話題をそれだけに決めていてtheを使う場合で、その話題と決めた名詞には形容詞的要素を付けて受信側に分かるようにする。theを使うことは発信側の意中で既に決まっているので、相手に分かるように形容詞的要素を補助に使う。

(4a1) Who is the man? では二人の人がいた場合どちらの人だか分からない。

(4a2) Who is the man smoking a pipe? で分かる。

(4b1) The boy is my brother.

(4b2) The boy in the box is my brother.

(4c1) The woman is our new teacher.

では、女の先生が何人もいるところでは分からない。

(4c2) The woman who has got the flowers on the stage is our new teacher. でわかる。

3. 定名詞句表現 と不定名詞句表現

(a) This is <the house that Jack built>.

第一の意味：「ジャックが生涯で建てた家は一軒である」

第二の意味：「いろいろな人が建てたある一群の家々＝ {集合: ジャック建立の家, トム建立の家, ビル建立の家...} のなかでこの家はジャックが建てた家である」

(b) This is <a house that Jack built>.

「ジャックは2軒以上の家をたてて、これはそのうちの1軒である」

先行詞を含めてある名詞句 [house that Jack built] が定冠詞 [the] を要求するか不定冠詞 [a, an] を要求するかは、その先行詞に後続する形容詞の働きをする節 [that Jack built] や句には関係なく、その名詞句 [house that Jack built] をどう意識するかによって決まる。

DIXIE=らんど (1996: 28) :

「関係詞が後ろから「限定」しているから先行詞の前の冠詞はtheになどとは絶対に考えてはいけない。これでは英語を後ろから見ていることになる。関係節という形容詞的要素は冠詞の決定とは関係がない。」

吉田 (1995: 138) :

「(先行詞) を含めてある名詞句が定冠詞を要求するか不定冠詞を要求するかは、関係節に関係なく、それぞれの冠詞の用法によって決まる。」

〈定名詞句表現 “the book I bought yesterday”〉と〈不定名詞句表現 “a book I bought yesterday”〉の場合について、以下、考察する。

つぎのような記述をしている参考書がある：

(1a) This is the book I bought yesterday.

(1b) This is a book I bought yesterday.

(1a) が正しいか、または (1b) が正しいか。この問題のむずかしさは両方とも成り立ち、しかもその用法がはっきりしない点にある。(引用終了)

談話から切り取られたセンテンスだけを対象にしてそのどちらが正しい、というようなことを議論することには危うさが伴う。また、「用法がはっきりしない」という表現は、学習者の誤解を招きやすい。

上記の表現について、談話の場面を想定した吉田 (1995: 139-140) の説明 (要旨) を紹介する：

(2a) The book is interesting.

(2b) */?? A book is interesting.

英語では、主語は既知情報 (古い情報) を表す傾向が強い。(2a) では発信側と受信側の間でどの本を指しているのか了解ができていれば意味をなす。(2b) では、発話時点で聞き手にどの本を指すのかわかっていない状態では、意味のある情報を伝達できない。聞き手がコミュニケーションを続けたいとおもえば、(2c) のように聞く。すると、その答は (2d) のようになる。

(2c) Which book are you talking about?

(2d) The book I bought yesterday.

つぎに、デニス＝キーン・松浪（1995：33－34）の提示した例文とその説明（要旨）を紹介し、考察を加える。

(3a) This is a book.

(3b) This is the book I bought yesterday.

post-modifierとしてのa relative clauseは、普通は、a specifierとして機能する。関係節は名詞をidentifyingするというよりは、たんに名詞に対するcommentingの場合である可能性もある。

(3c) This is a book I bought yesterday.

(3b) は (3c) のようにも読める。なぜか、これは、こんな場面を想定するとはっきりする。I bought a book yesterday. と私が言うと、だれかが、それはどれですかWhich one is it? と質問してくる。するとわたしは、つぎのように答える：

(3d) This is the book I bought yesterday.

考察：

この場合、theによる指示特定化の意味対象は談話テキスト内から想定できる〈名詞句表現＝“a book I bought yesterday”〉である。

(3e) Look, this is a book I bought two years ago, and this is a book I bought yesterday. Notice the difference.

私の所持本は何ヶ月もすると白カビでひどい状態になる。日本の夏はこ
とに蒸し暑いからなおさら。そこで私は (3e) のように言う。

この場合、どちらの本もspecific booksとみられていない、そうではなく

て、これらはtypes of their class である。

考察：

それぞれは、そのそれぞれの同類集合からとりだされた典型的な一例である。

つぎに、熊山（1985：237）の提示した例文とその説明を紹介して、その後に考察を加える。

形容詞節が、前にくる名詞を修飾すると、その名詞は「形容詞節によって叙述された範囲内の意味を持つ名詞」となり、被修飾語の名詞は限定された意味を持ちますから、特殊化します。その特殊性を表わすためにtheが必要になります。

(4a) This is a book that I bought yesterday. (2冊かそれ以上買ったうちの1冊)

(4b) This is the book that I bought yesterday. (買った本は1冊だけで、これがその本です)

考察：

(4a) について：“a” は「名詞 book」だけにではなくて「名詞句 book I bought yesterday」にかかっている。「昨日購入した本 book I bought yesterday」の何冊かのうちの1冊を意識して指をさしている場面での発話である。関係詞節の付加は義務的ではなく、コメントとしての追加情報である。

(4b) が、theによる特定者指示の意味対象が場面文脈の特定存在として、あるいは談話テキスト内の特定名詞語句として、受信側に認知され得

ない初出の定名詞表現the bookを発話する場合であるとする。この場合においては、義務的にpost-modifier（例として“I bought yesterday”）を追加する必要がある。これによって、theによる特定指示の意味対象が「ひとつの全体を構成するある一つだけのカテゴリーに決まる特定の部分要素」として受信側に認知され得るようになる。ひとつの全体とは、[A, B, C, ...]のような集合体のことを言う。ここにおいて、A=〈昨日購入した本“book I bought yesterday”〉, B=〈一昨日購入した本“book I bought the day before yesterday”〉, C=〈一週間前に購入した本“book I bought a week ago”〉, ...である。

〈定名詞表現“the book I bought yesterday”〉のtheは、この集合からAだけを、「ひとつの全体を構成するある一つだけのカテゴリーに決まる特定の部分要素」として、「それ以外の日々に購入した本」と対照しながら、特定者指示の意味対象とする。したがって、〈定名詞表現“the book I bought yesterday”〉は、「(別の日に購入した本ではなくて)昨日購入したの本」というほどの意味になる。購入した冊数については、定冠詞の基本用法に基づいて考察すれば、「一冊だけ」ということになる。

「一冊だけか」という点については、下記のような例文を参考にして疑問点を氷解することができる。

(5a) This is a book I bought yesterday.

(5b) This is one of the books I bought yesterday. 「全冊のうちの一冊」

(5c) These are two of the books I bought yesterday. 「全冊のうちの二冊」

(5c) These are some of the books I bought yesterday. 「全冊のうちの数冊」

(5d) These are among the books I bought yesterday. 「全冊のうちの数冊」

(5e) These are all of the books I bought yesterday. 「全冊」

(5f) These are all the books I bought yesterday. 「全冊」

(5g) These are the books I bought yesterday. 「全冊」

(5h) This is the only one book I bought yesterday. 「一冊だけ」

(5i) This is the book I bought yesterday.

4. THE：辞書における説明例—限定の語句を伴う場合

・ CD-ROM版 ランダムハウス英語辞典

[1] (3) 限定の語句を伴うとき:

the right answer 正答

the book you gave me あなたがくださった本.

(考察) a book you gave me という不定名詞句表現も可能である.

・ CD-ROM版 ジーニアス英和 (第3版)・和英辞典

4 [後方照応的]

a [説明の語句が付いて限定される名詞の前で]

The principal of our school is Mr. Wada.

私たちの学校の校長は和田先生です

《◆ただし a teacher at our school 「私たちの学校の教師」 はどの教師か定まらないので the ではない. /

That doesn't sound like the Bill I know.

いつものビルと違うみたいだな 《◆ビルの意外な発言を聞いて》 /

He is said to be the Edison of Japan. 彼は日本のエジソンといわれている

《◆He is an Edison. は限定が弱く「彼はエジソンのような発明家だ」》.

・ CD-ROM版 ジーニアス英和大辞典

4 [後方照応的]

a [説明の語句が付いて限定される名詞の前で] _

The principal of our school is Mr. Wada.

私たちの学校の校長は和田先生です

《◆ただし a teacher at our school 「私たちの学校の教師」

はどの教師か定まらないので the ではない. /

The book you handed me isn't mine.

あなたが渡してくれた本は私のではない /

He is said to be the Edison of Japan.

彼は日本のエジソンといわれている

《◆He is an Edison. は限定が弱く「彼はエジソンのような発明家だ」》 /

(考察)

「限定が弱い」という表現は誤解を招く。限定するか、しないか、のどちらかであってその中間の状態があるのではない。世の中に「エジソンのような発明家」は多数いて、そのうちのひとりである、という意識の発話である。限定が弱いから不定表現にするのだ、という説明は学習者を困惑させやすい。

the Janet next door 隣のジャネット /

the Venice of story books お話の本に出てくるベネチア /

the Kobe I love 私の愛する神戸.

11 [複数の普通名詞・集合名詞の前で] すべての 《◆all を伴っても同意》

These are the pictures she painted.

これは彼女が描いた絵の全部である

《◆the がなければ「一部」の意味で some ... と同意》／

12 [通例否定文・疑問文で；抽象名詞+ to 不定詞の前で] …するのに十分な…；〔…に〕十分な〔for〕

He didn't have the courage to go there.

彼にはそこへ行く（だけの）勇気がなかった。

13 [強調する名詞の前で] 真の，一流の，あの有名な，典型的な，最も必要な 《◆印刷する場合はイタリック体》

This is not the method but a method.

これは唯一の方法でなく 1つの方法である／

This is the place for young people.

ここは若い人にまさにうってつけの場所である／

“My name is Tiger Woods.” “You're not the Tiger Woods, are you? The famous golfer?”

「タイガー＝ウッズです」「まさかあの有名なゴルファーのタイガー＝ウッズさんじゃないでしょうね」。

・ CD-ROM版 新グローバル&ニューセンチュリー英和・和英辞典

前後関係やその場の状況又は説明句によって限定されそれと分かる名詞の前で：

the day before yesterday おととい。

This is the book she was talking about

彼女が話題にしていたのはこの本だ。

最上級, 序数詞, onlyなどの前につけて:

Tom is the tallest of us.

僕らの中でトムが一番背が高い.

Of all seasons I like autumn (the) best.

すべての季節の中で秋が一番好きだ

(副詞の最上級ではしばしばtheが省かれる).

Ann was the third person to arrive. アンが3番目に到着した.

Mr. Smith is the only Englishman in this school.

スミス先生はこの学校でただ1人の英国人だ.

〔語法〕 1つに限定する力が弱い場合には不定冠詞を付ける:

a most beautiful day (本当によく晴れた日),

an only child (ひとりっ子).

(考察)

「限定する力が弱い」について:

「specifyあるいはidentifyするか, しないか」のどちらかであって, その中間に強弱の程度の差があるのではない.

“a most beautiful day” は, “other most beautiful days” と対照して使う.
mostの意味: very FORMAL used for emphasizing a particular quality: We spent a most enjoyable afternoon wandering through the park. (Macmillan Publishers Ltd. 2002) “an only child” は, “other only children” との対照で使う. “only child” = a child who has no brothers or sisters (Macmillan, 2002).
このように, Macmillanは成句扱いしている. onlyをこの意味で使うのは, あとは, “only son”, “only daughter” くらいである.

- ・ Macmillan English Dictionary on CD-ROM for Advanced Learners of American English (Macmillan Publishers Ltd. 2002)

The is used as the definite article before a noun.

5 used when explaining which person or thing you are referring to:

Who was the actor who played Romeo?

We live in the house with green shutters.

We will be interviewing Peter Carey, the author.

6 used before a noun that refers to an action, especially when it is followed by *of*

the destruction of a whole city

the death of Queen Victoria

the burning of several houses

• Random House Webster's Unabridged Dictionary on CD-ROM, Random House, Inc.

1 . (used, esp. before a noun, with a specifying or particularizing effect, as opposed to the indefinite or generalizing force of the indefinite article *a* or *an*): the book you gave me ; Come into the house.

• The American Heritage Dictionary of the English Language on CD-ROM

1 . a. Used before singular or plural nouns and noun phrases that denote particular, specified persons or things: *the baby*; *the dress I wore*.

• Collins COBUILD, English Dictionary for Advanced Learners, on CD-ROM, (HarperCollins Publishers)

The is the definite article. It is used at the beginning of noun groups.

2 You use *the* at the beginning of a noun group when the first noun is followed by an 'of' phrase or a clause which identifies the person or thing.

There has been a slight increase in the consumption of meat.

Of the 9,660 cases processed last year, only 10 per cent were totally rejected.

12 You use *the* to indicate that you have enough of the thing mentioned for a particular purpose.

She may not have the money to maintain or restore her property.

We must have the patience to continue to work until we will find a peaceful solution.

Carl couldn't even raise the energy for a smile.

• Merriam Webster's Collegiate Dictionary on CD-ROM, Merriam-Webster, Incorporated.

1 a • used as a function word to indicate that a following noun or noun equivalent is definite or has been previously specified by context or by circumstance

put the cat out

5. THE：大学教科書における説明例—限定の語句を伴う場合

post-modifier (qualifier) を伴う定名詞句，不定名詞句について大学生用英語教科書にも説明がみられる。しかし，この説明がみられる教科書は少ない。意図的に掲載していないのかもしれない。

● 「post-modifier (qualifier) を伴う定名詞句，不定名詞句」については触れていないあるいは説明のない教科書の例：

1. 柿本文哉・吉崎昭郎・梶 拓郎・佐藤哲三.『大学生のための基本英文法』東京：南雲堂. 1997. p 37, p40.

定冠詞の用法(1)

- (1) There is a book there. The book is written in English.(前述の名詞の指示)
- (2) Shut the door. (周囲の状況,前後関係から自明なもの)
- (3) The earth moves around the sun. (唯一のもの)
- (4) Mt. Fuji is the highest mountain in Japan. (最上級や序数の前)
- (5) likes playing the guitar. (楽器名) cf. They are playing soccer. (競技名)

定冠詞の用法(2)

- (1) He seized her by the arm. (人体の一部を指して)
- (2) My grade in English was in the eighties. (-tiesで終わる複数形と共に)
- (3) rich are not always happy. (the rich =rich people)

They pursued the beautiful. (the beautiful = beauty)

- (4) We hired a boat by the hour. (単位を示す)
- (5) the Nile, the Pacific Ocean, the New Tokaido Line, the Mainichi, the White House, the Alps, the Philippines (河川・海洋, 船舶, 列車路線, 新聞・雑誌, 公共建造物, 山脈, 群島などの名称に) ※例外: Tokyo Bay, Lake Biwa

2. 永嶋大典・野呂俊文・矢作三蔵.『新大学英文法—シンタックスの要点 第14刷』. 東京：南雲堂. 1990. p122-p123.

定冠詞 (Definite Article)

- (1) 種類全体を総称的に表わす用法 (Generic “the”). Who invented the radio?
She can play the violin.
The lion is the king of beasts.
God made the country and man made the town.

- (2) 「典型的な」「真の」「うってつけの」という強調用法.

He is the gentleman.

This is the drink for cold weather.

The play is the thing. (Shakespeare)

(芝居こそうってつけのものだ.)

注意 the thingの場合はthingに強勢がある.

- (3) 通常1つしかないと考えられるものに付ける.

the sun, the moon, the east, the west, the right, the left, the Lord, the Bible,
the Pope, etc.

注意 sea, skyなどに形容詞が付いて海や空の特定の様相を表わす場合は通例aを用いる.

A cloudy sky is not always sign of rain in this country.

- (4) the=per.

The workers are paid by the week.

This cloth is sold at four pounds the yard.

- (5) 既出の人物の身体の一部を表わす場合,代名詞の所有格の代わりに慣用的にtheを用いる.

(a) I looked him in the face.

(b) I looked in his face.

注意 (a) ではhimに, (b) ではfaceに重点がある.

- (6) 名詞の表わす人・物の性質や象徴的意味を抽出する用法.

When one is poor, the beggar will come out. (乞食根性)

She felt the mother rise in her heart. (母性 [本能])

3. 田本健一・Simon Sanada.『基本英語表現法 重版』.東京:成美堂.
2000. p38.

定冠詞 (Definite Article) the—特定のものをさす場合に用いられる.

He bought me a watch yesterday. This is the watch

(彼は昨日私に時計を買ってくれた。これがその時計です。)

※ 注意すべき用法：the rich (金持ち), the Smiths (スミス家)

4. 池永勝雅・中村優治.『大学ベーシック英文法 第22刷』.東京：桐原書店. 2001. p29

定冠詞の用法

I have a camera. The camera is new. (前出の名詞)

Please close the door. (状況より明らかな時)

The last train leaves here at ten. (特定化する語がある時)

the sun, the earth, the moon (唯一物)

the Alps, the Pacific, the Asahi (山脈, 海洋, 新聞など)

5. 佐藤哲三・愛甲ゆかり.『大学生の英語入門』.東京：南雲堂. 2001. p28.

I have a car. The car is old.

The earth moves around the sun.

a, anは「1つの」という意味で、数えられる名詞の単数形につける。母音で始まる単語の前にはanをつける。②前に一度出た名詞を指す場合や周囲の状況から特定できる場合はtheを用いる。③世界でただ一つしかないものを指す場合にはtheを用いる。他に、最上級や序数のついた名詞や、川・船・橋などの名詞にもtheをつける。

6. 小中秀彦.『大学生のための基礎英文法』.東京：成美堂. 2002. p18.

Will you open the window? [状況でどれを指すか明白な場合]

Harry and I were born on the same day. [特定する語句がつく場合]

The pen is mightier than the sword. [抽象観念を表す場合]

定冠詞 (the) は特定なものを表す名詞の単数形・複数形につき、数えられる名詞にも数えられない名詞にもつき、前出の名詞を指す場合、前後関係や状況でどれを指すか明白な場合、特定化する語句がついている場合、総称を表す場合、抽象観念を表す場合、常識的に考えて「唯一のもの」を表す場合などに用いられる。

7. 奥田隆一・山本英一.『基礎英文法・総合演習 第3刷』.鷹書房弓プレス. 2002. —冠詞については説明されていない.

8. 角岡賢一.『楽しく学べる大学英語』.東京:松柏社. 2002. —冠詞については説明されていない.

9. テリー＝オブライエン・三原 京・橋本由紀子・村松秀紀・木村博是.『文法中心の大学英語』.東京:南雲堂. 2003. p1.

不定冠詞は初出の普通名詞, 定冠詞は既出の名詞

Paul bought a radio and a Walkman, but he gave the Walkman to his brother.

● 「post-modifier (qualifier) を伴う定名詞句, 不定名詞句」について触れているまたは説明のある教科書の例:

1. 奥田隆一・山本英一.『英文法・英作文—誤りやすい表現中心 第9刷』.東京:弓プレス. 1998. p6.

不定冠詞と定冠詞

- (1) There is a book on the table. cf. There are some books on the table.
- (2) I met a man. The man gave me his book.
- (3) water is very cold.
- (4) The information we got was very important.

相手にどれかわかる（特定の）場合には、不可算名詞であっても the を使う。

（考察）(4)の定名詞句は、たとえば“the information they got”と対照して使う場合である。ひとつの全体を構成する集合のなかからある部分要素だけを対照的に指示して特定化する使い方に相当する。

2. 長谷川瑞穂・木全睦子. 『学習者中心の最新英文法』. 東京：朝日出版. 1999. p98-p99.

後置修飾語

主要語の後ろの要素が後置修飾語である。後置修飾語は一般に、修飾する名詞の一時的な性質を表わす。

- a. The people present are opposed to changing the rules.
- b. I like the tone of your voice.
- c. The picture which he bought in New York was very expensive.
- d. The little girl crying in the bed is Jane.

前置詞句が2つ重なったり、節による修飾語と重なって、名詞を修飾する場合もある。

- a. The books on grammar in this library are donated by my teacher.
- b. The picture on the wall which he bought in New York was expensive.

このような場合、名詞との結びつきが強い句の方を前（名詞の直後）に置く。句と節がある場合は句の方が前に来る。

（考察）ここには、post-modifierを伴う不定名詞句は掲載されていない。

3. 中畑 繁・ジョセフ＝ベンソン. 『VOA & 文法 第7刷』. 東京：南雲堂. 2000. p122-p123.

Articles

<Points to Remember>

(1) Use the with things whose identity is certain:

(a) You're not supposed to walk into someone else's house and take food out of the refrigerator.

(b) The bus stops here every hour.

(2) Use the with the second occurrence of a noun :

Willie saw a man and a woman. Carefully, he spoke to the man.

(3) Use the with nouns that are followed by a modifying expression :

(a) This is the man I told you about.

(b) The flower in that vase is beautiful.

(4) Use the for an entire class of things :

(a) The fox is a smart animal. (Foxes are smart animals.)

(b) The word processor has changed people's writing habits.

(5) Use the with adjectives that classify or order :

(a) This is the worst banana I have ever tasted.

(b) Johnny was always the last in his class.

(6) Use the with abstract nouns followed by an of phrase :

(a) Thomas Jefferson spoke of the wisdom of the masses.

(b) The laziness of my students is amazing.

- (7) Use the with gerunds followed by an of phrase: :

The ringing of the church bells woke us up every morning.

- (8) Use the before a noun in an of phrase, if a word showing quantity comes before the of phrase :

One of the radios cost \$100.

cf. One of my radios cost \$100.

Note: Some other determiners are also possible.

- (9) Use the for the names of some places :

(a) the United Arab Emirates

(b) the Appalachian Mountains

- (10) Use the before historical periods or events :

(a) the French Revolution

(b) the War of 1812

- (11) Use the with words and expressions that show time:

(a) From the start to the finish, he ran.

Note: shows time sequence.

(b) She sleeps through the night.

Note: indicates nights in general.

4. 大島 真・加藤忠明・菊池圭子・竹前文夫・松本理一郎・William F. O'Connor. 『コミュニケーションのための大学英語入門 第7刷』. 東京：南雲堂. 2002. p63-p64.

冠詞にはa(n)とtheがある。a(n)は初めてのもの、見知らぬもの、それゆえ心理的に遠いものに付ける。theは知っているもの、見慣れたもの、そ

れゆえ心理的に近くにあるものに付ける。

(1) I saw a doctor who lives in town.は「町の（初めての）医者に診てもらった」

(2) I saw the doctor who lives in town.は「町のいつもの医者に診てもらった」の意味となる。

（考察）発話場面が不明で前後の文脈から切り離された例文を提示したものであるので、錯誤が生じやすいし議論が不毛に終ることもあるが、つぎのようにも解される。

(1)は“other doctors who lives in town”と対照して使う場合であるとすれば、街に何人もの初めてみてもらえそうな医者があることが含意されていることになって、そのうちの一人に診てもらった、という意味にとることができる。(2)では、例えばこのdoctorという表現が談話のなかでの初出表現であるのなら、“the doctor who lives in town”は“the doctor who does not live in town”と対照して使われているとも考えられるので、街には医者は一人しかいないことが含意されていることになる。またもし文脈の上流においてあるdoctorがすでに登場していてその医師を指示しているのであれば、who以降の関係詞節情報は、追加情報であるから、限定[制限]用法関係詞節を追加するのではなくて、非限定[非制限]用法の関係詞節を追加するほうがよい、と思われる。

次の定冠詞 (the) はどんな用法で使われていますか。下のa~gより選んで、() 内に記号で答えなさい。(p64)

a. 前の名詞を表す

b. 後続の語句による限定

c. 場面・文脈からの特定

d. 種類全体の総称

e. the+普通名詞=抽象概念

f. byとともに用いて単位を表す

g. the+形容詞＝複数名詞・抽象名詞

- (1) The pen is mightier than the sword.
- (2) I bought a personal computer. The manual is not easy to understand.
- (3) Will you pass me the sugar?
- (4) In Japan meat is sold by the kilo, not by the pound.
- (5) The automatic pencil on the desk is not yours. It's mine.
- (6) Higashiyama has an eye for the beautiful. He is an artist.
- (7) The eagle is the king of birds and the lion is the king of beasts.
- (8) I have been to the post office.

(考察) “The automatic pencil on the desk” には、例えば “The automatic pencil on the chair” との対照が意識されているかもしれない。例えば「机の上のほうのは君のではなくて、僕のだけれども、椅子の上にあるほうのは、君のも、僕のじゃないね」というような意識である。“The automatic pencil on the desk” は一本のみであることも含意されている。机上に複数本の “automatic pencil” がある場合には、不定名詞句 “an automatic pencil on the desk” の使用が可能である。したがって、「後続の語句による限定」という説明は好ましい説明とはいいがたい。先行して意味的なカテゴリーを決めるのは、aまたはtheであり、そのカテゴリーに適切な「名詞句 “automatic pencil on the desk”」が選ばれる、というような指導法にしたい。

6. まとめ

本稿では、“織田 稔. 2002.『英語冠詞の世界』” をさらに敷衍して「関係詞節などによるpost-modifier [qualifier] 情報」が追加される「名詞句」

についての、冠詞の使われ方について、若干の考察を試みた。

6.1 「上流側 [=冠詞] から下流側 [=名詞] を見る」について：

松本 亨先生は、嘗て、つぎのように言われた：「われわれに一番苦手なのは英語の冠詞である。このむずかしさは、英語国民には到底わかってもらえない。私も随分悩まされてきたし、現在でもてこずっている。これといった決め手になる参考文献も持っていない。」（出所：松本 亨、『英語で考える本』英友社、初版：1968、改訂1版：1980、改訂24版：2001、p228.）

日本で生まれ育った多くの日本人は、英語の名詞の意味感覚をその和訳語から感じ取りそれを拠り所として冠詞がどのように使われているのかを判断しているようなので、和訳語の意味感覚から受ける常識では律し切れない謎だらけの冠詞用例に遭遇してしまう。

こういう状況に対応するかのように、嘗てマーク・ピーターセン先生はつぎのような示唆をされた：

「この名詞あるいは名詞句に何がつくとか、つかないとかあらかじめ約束で決まっているわけではなく、その名詞あるいは名詞句をどう意識するのかで決まってくるといえる。名詞あるいは名詞句に a や the がつく、のではなくて、先行して意味的なカテゴリーを決めるのは a や the であり、そのカテゴリーに適切な名詞あるいは名詞句が選ばれるのはその次である。冠詞は名詞あるいは名詞句につくアクセサリーではないし英語は後[下流側]から考えるものではない。」

ネイティブ・スピーカーの感覚では、冠詞があって、そして名詞あるいは名詞句がある、ということである。冠詞の使いかたについての判断の順序は上流側にある冠詞が先である。下流にある名詞あるいは名詞句の意味を反転して、どのような冠詞をつけるのかを考えるべきではない、というご示唆のように思われる。

6.2 「“the”あるいは“a または an”（以下，“a または an”は“a”で代記する）は「名詞[先行詞]＋post-modifier」の名詞句全体に対してかかっている」について：

“the book I bought yesterday”と“a book I bought yesterday”の場合の“the”あるいは“a”は、それぞれ，“book”という名詞[先行詞]のみにかかっているのではなくて，“book I bought yesterday”という名詞句の全体にかかっている，ということを考察した．言い換えると，“the”あるいは“a”は「名詞[先行詞]＋post-modifier」の全体に対してかかっている，という考察をした．

“beautiful flower”の場合，この「pre-modifier＋名詞」の形の名詞句に対して“the”と“a”のどちらを使うべきであるのかというようなことは，ほとんど議論の対象にされることがない．なぜかと言えば，定冠詞，不定冠詞の本質が理解されていれば，あとはすべて場面・文脈が説明してくれるからである．

「先行詞情報とこれに追加される関係詞節情報とを分離したままにして文意を考えようとする」という学習態度を半ば固定化させてしまっている要因の一つは，英語学習のある段階における関係代名詞の教え方に起因したいわば「刷りこみ現象」の一つである，と言えるかもしれない：

I have a son. 「息子は一人だ」

He has become a doctor. 「その（一人）息子は医者になっている」

というような二つの文を制限用法の関係代名詞で結んで次のような一つの文に転換するという半ば機械的な練習を英語学習のある段階で行う．この場合，できあがった次の文の意味は，上記の初めの二つの文が表わす意味内容と等価になっているとは限らない，ということにはあまり注意が払われてきていない．

I have a son who has become a doctor.

「息子のうちで医者になったのがいる」

ところが、この初めの二つの文を非制限用法の関係代名詞で結んで次のような一つの文に転換する場合は、できあがった次の文の意味は、上記の初めの二つの文が表わす意味内容と等価になっている、と言える。

I have a son, who has become a doctor.

次の用例も同じ様な考察を促しているが、さらに、「冠詞の使われ方の観察には発話の場面や前後の文脈に対する理解が大切である」ということも示唆している：

[The passengers who were severely injured] were sent to the hospital.

「乗客のうちでけがをした（ほうの）ものは全員、病院おくりとなった」における [The passengers who were severely injured] は、

[The other passengers who were not severely injured]

という（文脈の下流側においてたぶん示唆される）選別的・対照的な存在を意識した「冠詞＋制限関係詞節」の使い方である。

これに対して、

[The passengers] , who were severely injured, were sent to the hospital.

「乗客は全員が怪我をして（その全員が）病院おくりとなった」における [The passengers] は、文脈の上流側にある「不特定多数の乗客」を指示・同定する冠詞の使い方である。

多くの学術書や教科書や参考書などにおける用例文は、発話場面が不明のまま前後の文脈から切り離されて提示されることが多いので、錯誤が生じやすく、議論が不毛になってゆくことになりやすい。

6.3 「(先行詞) を含めてある名詞句が定冠詞を要求するか不定冠詞を要求するかは、関係詞節に関係なく、それぞれの冠詞の用法によって決まる [吉田 (1995: 138)]」について：

以上の検討結果を集約すれば、上記のような表現となる。しかし、英語の学術書や教科書や参考書には次のような記述をしているものが多く見ら

れる。

例：「形容詞の働きをする節や句がつくとその名詞にはtheがつく [金谷 (2002: 21)]」

初出表現としての “book I bought yesterday” という「名詞 [先行詞] + post-modifier」の形の名詞句に対して上記の命題が正当であることを以下に検証してみる。(初出の “a” に言及する説明は多くの学術書や教科書や参考書において見られるが、初出の “the” に言及する説明はあまりみられない。このことがtheの理解に対する障害の一つになっているように思われる)

(1a) This is <*the* house that Jack built>.

第一のメッセージ内容：「ジャックが生涯で建てた家は一軒である」

第二のメッセージ内容：「いろいろな人が建てたある一群の家々 = {集合：ジャック建立の家，トム建立の家，ビル建立の家...} のなかでこの家はジャックが建てた家である」

(1b) This is <*a* house that Jack built>.

「ジャックは二軒以上の家をたてて、これはそのうちの1軒である」

先行詞を含めてある名詞句 [=house that Jack built] が定冠詞 [=the] を要求するか不定冠詞 [=a, an] を要求するかは、その先行詞に追加される「形容詞の働きをする節 [=that Jack built] や句」には関係なく、その名詞句 [=house that Jack built] をどう意識するかによって決まる、ということをも (1a) (1b) の二つの文章からうかがい知ることができる。

(2a) *Shibuya is the place that young people like.

「渋谷は若者が好きな唯一無二の場所だ」

(2b) Shibuya is a place that young people like.

「渋谷は若者が好きな場所（のひとつ）だ」

ミントン先生は、(2a) (2b) の例文のうち、(2a) はナンセンスである、とされる。なぜなら、(2a) は、渋谷が若者の好きな唯一無二の場所である、の意味となるからである。ところが、ミントン先生の生徒 [=大学生や予備校生] の多くが限定用法の節によって修飾されている名詞の前には定冠詞を置かねばならない、と思いこんでいるようである、と述べておられる [English Journal. April 2003. pages 71-2.]。

以上の考察によれば「post-modifierによる限定が強い、あるいは限定節や限定句がつく、あるいは限定用法の節 [a restrictive clause] がつくと、先行詞に“the” がつき、post-modifierによる限定が弱いと“a” がつく」という従来からの説明の仕方は混乱を招きやすい説明である、と言えることになるかもしれない。混乱を招いているもうひとつの要因は「限定（用法の）節」「制限（用法の）節」「限定が強い」「限定が弱い」「特定する (specifyあるいはidentify)」「修飾する(modify)」というような用語が多様に使われている点にあるのかもしれない。「限定（制限）節」に対しては「非限定（非制限）節」というような用語があるので、この説明を聞いていた学習者が「限定節ならば限定しており、非限定節ならば限定していないと理解していた」のに、「限定が弱いものには a を使う」あるいは「限定が強いものには the を使う」というような説明を聞いたり読んだりするに及ぶと、その学習者はいくばくかの戸惑いを感じることになってしまうのかもしれない。

6.4 「説明法の工夫：一つに決まる名詞句にtheを使う」について：

説明の仕方の表現を変えて、「一つに決まる名詞句にtheを使う」あるいは

は「theを使って名詞句の意味を一つに決めることにより対象内容に対する聞き手側からの同定化を図る」という意識化を図ることによって、冠詞の使い方の感得をはかる方がよいかもしれない。場面や文脈によって話し手と聞き手の間で共通の理解が得られる“the”の使い方も、あるいは、常識的に一つしかない、と考えられる「お天道様」や「お月さま」に使う“the”も、あるいは、最上級に使う“the”も、「ひとつに決まるものには“the”を使う」という言い方でまとめることができそうである。

さらに、初出の名詞に“the”を使う場合にもこの説明の仕方が通用する：話し手はpost-modifier (qualifier) という情報を追加して「ひとつのものに決めるのだ」という意識を働かせる（ネイティブの場合は直感的にこういう思考をしているものと思われるが）。ひとつのものに決まるので、聞き手は指示対象を同定する [identify] ことができることになる。

This is <the house that Jack built>.

第一のメッセージ内容「絶対的な一つに決まる場合」：

「ジャックが生涯で建てた家は一軒である」

第二のメッセージ内容「一つの全体を構成する集合の中から特定の部分要素を“the”によって選別的対照的に指示する場合」：

「いろいろな人が建てたある一群の家々＝ {集合：ジャック建立の家, トム建立の家, ビル建立の家...} のなかでこの家はジャックが建てた家である」→「この家はほかの人が建てた家ではなくてジャックが建てた家である」

この第二のメッセージ内容の伝え方が、“織田 稔. 2002. 『英語冠詞の世界』”のハイライトのひとつである。

本文中にも引用した下記のデニス＝キーン・松浪 (1995: 31-34) による

「ネイティブ・スピーカー感覚」は、この考え方の正当性を裏付けているように思われる：

I suppose the most general problem a foreign student has with the articles is when the particular noun is qualified by an adjective, or a clause, or a phrase beginning with 'of.

"I am studying history."

"I am studying the history of English Literature."

"I am writing a history of English Literature."

"I am writing a history of the English Literature of the eighteenth century."

However, if one bears in mind the distinctions already made, there is no great problem here. "History" is seen as a mass or uncountable: if we talk about "a history" then it is being seen as a unit, as the book I am writing for example, or as something which is complete in itself and can be compared with other things of the same type. "The" is the specifying word: "the history of English Literature" sees itself as contrasted with, say, "the history of French Literature." "A history of English Literature" sees itself contrasted with other histories of English Literature. If one says of a writer that he has written *the* (stress pronounced) history of English Literature, this implies that it is so good that it makes all the others seem unimportant, and thus becomes, as it were, the only one worth reading or talking about.

宇賀野正明氏は、“織田 稔. 2002. 『英語冠詞の世界』” に対する書評（『英語青年，2003年4月号，pp58－58』）において、「一つの全体としてのセットの中から特定の部分個体を同定指示するための用法」は本書のハイライトの一つである，と同時に，今後の研究に対する誘発的側面をもつ，という主旨の予見をされている。

デニス＝キーン・松浪（1995：31－34）のつぎの説明も示唆に富む：

Take two more sentences:

“You should drink medicine which is good for you.”

“You should drink the medicine which is good for you”

The first sentence has a comment made on medicine: "because it is good for you." No specific medicine is being mentioned. But in the second sentence you are being advised to drink only that medicine that is good for you, not that medicine that is not good for you. Medicine is being specified.

不可算名詞句に「ゼロ冠詞」を使った上記の “You should drink <medicine which is good for you>.” という文例は、可算名詞句に「不定冠詞」を使った前述の下記の文例に対応しているように思われる。

“This is <a house that Jack built>.

「ジャックは2軒以上の家をたてて、これはそのうちの1軒である」

6.5 「英語という言語をなるべくならば、左〔上流側〕から右〔下流側〕へと自然に紡ぎだしてゆこうとする工夫」について：

名詞（句）の左側〔上流側〕に先行することになる前置詞や冠詞をどのように発想したらよいのだろうか。その答は、どうも、その名詞（句）を話し手がどのように意識するかにかかっている。

at Tokyoと言う場合のTokyoは、例えば地図上の一点として意識されていて、まずatと発話されるのかもしれない。in Tokyoと発話される場合は、話し手は街の中とか街並みといった感じの大きな容器のようなものをイメージして、まずinと言い出すのかもしれない。

同じような感じで、the house that Jack built という場合は、「それひとつだけで、ほかにはないもの」を意識して、まずtheを発話するのかもしれない。a house that Jack builtと言う場合は、同類のものの一つ、ということを意識して、まず不定冠詞を発話するのであろう—この場合、不可算の名詞句を意識する場合はればゼロ冠詞とするのかもしれない。

ネイティブ・スピーカーは直観によってこういうことを決めているのであろうが、このことは大方の日本人が「ハ」や「ガ」を直感的に使っていることに類似しているのかもしれない。しかし、この「ハ」と「ガ」の使い方に関しても、日本語を研究している日本に生まれ育った学者の間にも、今もなお諸説があるようで、普通のひとにはなかなか明快な説明ができそうにもない。冠詞の使い分けに関しても、直観のプロセスに立ち入るような領域については、「ネイティブ・スピーカー学者による文献」は少ないようであり、日本における「ハ」と「ガ」と研究の状況と同じような状況が英語を母語とする国々にも存在しているのかもしれない。

英語を左〔上流側〕から右〔下流側〕へと自然に紡ぎだしていく、というflowのなかにどのような直観が働いてtheやaやゼロ冠詞が使われることになるのか、織田先生は50年にわたる研究を通してそれに光をあてられた。この冠詞と、さらに関係詞節という日本語からみてやや遠くに見える存在との結びつきに対して、ネイティブ・スピーカーは、冠詞を発想するとき、名詞に追加するqualifier (post-modifier) 情報をどのように意識しているのだろうか、どんなイメージを働かせているのだろうか、その直感的なプロセスとはどのようなものだろうか。こういうことが今後さらに一段と明らかにされてゆけば、それは日本に生まれ育った日本人にとって、その人々が英語を紡ぎだしていくときの大きな福音のひとつになってゆくように思われるし、また英語の神様とも言われた松本 亨先生にもきっとお喜びいただけるすてきなプレゼントにもなってゆくように思われる。

7. 謝辞

本草稿のとりまとめに際しまして、織田 稔先生からのご指導、ご示唆をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。さらに安田和生先生はじめ、日本実用英語学会、横浜時事英語クラブの会員諸氏のかたがたから

さまざまなお指導，ご示唆，文献のご紹介などをいただきました。あわせて厚くお礼申し上げます。

(本稿は，日本実用英語学会第159回研究会 [2003. 5. 17. 東京：早稲田大学] における研究発表時のハンドアウト資料に対して補筆をほどこしたものです)

資料（網掛け部分は本論文作成者によるもの）

(資料1) 「デニス＝キーン・松浪 (1995: 31-34) の英語原文」と注記：

I suppose the most general problem a foreign student has with the articles is when the particular noun is qualified by an adjective, or a clause, or a phrase beginning with 'of.

"I am studying history."

"I am studying the history of English Literature."

"I am writing a history of English Literature."

"I am writing a history of the English Literature of the eighteenth century."

However, if one bears in mind the distinctions already made, there is no great problem here. "History" is seen as a mass or uncountable: if we talk about "a history" then it is being seen as a unit, as the book I am writing for example, or as something which is complete in itself and can be compared with other things of the same type. "The" is the specifying word: "the history of English Literature" sees itself as contrasted with, say, "the history of French Literature." "A history of English Literature" sees itself contrasted with other histories of English Literature. If one says of a writer that he has written the (stress pronounced) history of English Literature, this implies that it is so good that it makes all the others seem unimportant, and thus becomes, as it were, the only one worth reading or talking about.

When I was a student I went to hear a novelist give a lecture on 'The English Novel'; i.e. that kind of novel written in English as opposed to that kind written in other languages. The novelist spent the whole lecture talking about one of his own novels. As I left the lecture hall a friend said to me: "That wasn't about The English Novel; that was about The English Novel." You can see how much meaning lies in these little words.

In the sentence 'I am writing a history of the English Literature of the eighteenth century', English Literature is made specific by 'of the eighteenth century'. **Eighteenth century is specific in itself, since there is only one.** But what about 'I am writing a history of eighteenth century literature'? What is the difference? Well, eighteenth century is functioning as an adjective here, **so it does not change literature any more than 'a big book' changes 'a book'.** You may then say that you can't see any logical difference; in the same way you can't see any difference between 'London University' and 'The University of London'. Why. have these big grammatical distinctions when they are not necessary? I can only answer by saying that sometimes the distinctions are necessary and the grammar of the language allows for this. We are dealing here with **the concept of things being 'specific'**; sometimes it matters, sometimes it doesn't. If, as an example not from grammar, we take the concept of lateness, sometimes this matters and sometimes not. If you are waiting for a friend and he is thirty minutes late you apply the idea of lateness: if you accused him of being thirteen and a half seconds late, that would be absurd. One cannot argue then that being thirteen and a half seconds late never matters: in a scientific experiment it could well be a matter of life and death. Similarly with our concept of what needs specification grammatically: sometimes it matters, sometimes it doesn't, but it is still retained in the language. In cases like 'The University of London' it is best not to think excessively hard about it (that would be like blaming someone for being thirteen and a half seconds late) but to follow usage. In 'I am studying the history of English Literature' (and not 'a') one can see how the concept matters (like being thirty minutes late).

That was **a digression [=脱線]**, but an important one, because one must understand that grammar is not a lot of **perverse [=unreasonable] nonsense.**

Now to return to the problem. A relative clause usually acts as a specifier.

"This is a book."

"This is the book I bought yesterday."

But there is no rule about this. The clause may just be commenting upon the noun, rather than identifying it. The above sentence could read;

"This is a book I bought yesterday."

Situations will make this clear. I mention that I bought a book yesterday. Somebody asks me which one it is. I say

"This is the book I bought yesterday."

I am talking about my books, and how badly mildewed they get after a few months,

because Japan is so humid in summer. So I say: "Look, this is a book I bought two years ago, and this is a book I bought yesterday. Notice the difference." In that case both books are not being seen as specific books, but as types of their class. Explanations are hard here, but I think the situations make the difference clear enough.

Take two more sentences:

"You should drink medicine which is good for you." (ϕ + 量状名詞 \Leftrightarrow a + 個体名詞)

"You should drink the medicine which is good for you."

The first sentence has a comment made on medicine: "because it is good for you." No specific medicine is being mentioned. But in the second sentence you are being advised to drink only that medicine that is good for you, not that medicine that is not good for you. Medicine is being specified. (対照性)

(資料2) 「<http://www.monjunet.ne.jp/PT>」から：

Mizuno, Asako 「翻訳さんぽみちー英語の冠詞と日本語の助詞の関係」からの引用です：

英語の冠詞と日本語の助詞の関係

— ([monjunet.ne.jp/PT/attorney](http://www.monjunet.ne.jp/PT/attorney)) からの引用：

●情報の発信側と受信側との間で1つに特定できるものは「定冠詞」

さて、記事を英語にしていく過程で、いやおうなしに過去原稿を細部にわたって読み直すことになりました。そして99年2月号と3月号の「冠詞の理解の仕方、使い方」まできて、この記事では触れなかった英語の冠詞と日本語の助詞との関係に気が付いたのです。そこで今回は、冠詞と助詞についてとりあげます。

冠詞は名詞に付くおまけではなく、文を構成する上で立派な役割を持っています。このため、英訳のときだけでなく和訳をするときにも冠詞には細心の注意を払うべきです。冠詞の用法がよく分からないという人は、かなり大ざっぱではありますが「1つしかないものは定冠詞」と覚えるとよいかもしれません。冠詞の用法は、この名詞には定冠詞である名詞には不定冠詞といった名詞依存のものではなく、伝達しようとする情報の内容によって変わります。以前も触れたことですが、情報を発信する側（書き手／話し手）と受け取る側（読み手／聞き手）との間で同じものを連想できる場合は、原則として定冠詞になります。同じものを連想できるということは、すなわち発信側と受信側との間で1つに特定できるということだからです。中高生向けに書かれた英語の参考書

では、ややこしい分類がなされていることが多いですが、要するに突き詰めてしまえば同じことなのです。たとえば、手元の参考書では定冠詞を使う場合として次のように書かれています。

1. 一度登場した名詞

発信側と受信側との間のことに限って言えば、両者の間にはその名詞が指すものは1つしかありません。双方が同じものを連想できますので定冠詞。

2. 当事者間で明白な場合

1. と同じ理由で1つしかありません。会話でのOpen the doorなどがこれに相当します。

3. 句や節で限定された名詞

たとえば単にwaterというだけでは特定できませんが、water from this spring (この泉の水) であれば1つに決まります。関係代名詞などで修飾語がつくと定冠詞だということも同じ理由で、修飾部分まで含めて内容を考えると1つに決まります。

4. 最上級の形容詞がつく名詞

これは言うまでもないでしょう。情報の発信側にとっても受信側にとっても同じ1つのものに決まります。

5. 序数詞がつく

順序を表す普通の序数詞であれば、情報の発信側と受信側で何を指しているのかは自明です。なお、単純に区別をするだけの目的で使われる序数詞は不定冠詞を伴いますので、このカテゴリには入りません。

6. the same/the onlyがつく

比較の対象になる何かがあり、その何かと同じであったり、唯一のものであったりする状態は、コミュニケーションの際に特定の1つに決まります。

7. 種類全体を表す場合

これも1つしかありません。情報伝達という視点で見れば、the whale is not a fish (鯨は魚ではない) という場合の「鯨という種類全体」は1つに決まります。whales are very large mammals that live in the seaなどの表現との区別が少々難しいかもしれませんが、複数無冠詞は一般論として客観的な表現をするときの表現で、種類全体をひとまとめにしているのとは違います。種類全体をひとまとめ

にする場合は、種類という定義のもとに特定する範囲が決まりますが、一般論としての表現は一層あいまいで概念的なものです。

8. the+形容詞/分詞＝「～の人々」

the richが「金持ちの人々」になるような例です。7. と同じ理由で、「金持ちの人々」という1つのカテゴリに決まりますので定冠詞。

9. ただ1つと考えられるもの

the moonなどがこれに該当しています。情報の発信側と受信側が別のものを思い描くことはありません。常に「月というもの」が連想されます。a crescent moonなど形容詞を伴うと不定冠詞になることがあるのは、細い三日月や太い三日月など、1つに決まるとは限らないからです。これが「僕が昨日見た三日月」ということになれば、the crescent moon I saw yesterday で3. の理由から定冠詞になります。

10. by the + 単位

1週間単位でといったときの用法です。普通は1週間と言われて8日なり9日なりを連想することはあり得ないでしょう。

いかがですか？適切な冠詞の選択は最終的には文脈依存になりますが、書き手と読み手の両方にとって1つに決まるかどうかを目安にすると、ある程度までクリアになります。逆に言えば、書き手は特定のものを連想できても読み手にはできない場合、あるいは書き手と読み手の両方とも特定のものを連想できない場合は、不定冠詞または無冠詞になるわけです。どちらになるかは、冠詞の後ろにくる名詞次第です。この点を考慮すると、特に不定冠詞+名詞で始まる文を和訳する際に、日本語の助詞に十分注意する必要があります。

日本語では、原則として「不特定」の情報に対する助詞は「は」ではなく「が」を使う。

たとえば、The connector has a pin. The pin is connected to an output terminal.という文章を考えてみてください。2つ目の文を日本語にする場合、多くの人が「そのピンは出力端子に接続されている」と訳すでしょう。では、これがThe connector has a pin. An output terminal is connected to the pin.だとどうでしょうか。実は、チェッカーとしてこのような文に対する訳を見ていると、「出力端子はそのピンに接続されている」といった形が意外と多いのです。ところが、output terminalは不定冠詞を伴っていますので、「そのピンには出力端子が接続されている」と訳すのが正しい形です。（助詞に「が」を使ってあれば「出力端

子はそのピンに接続されている」という語順でも可ですが、「そのピンには」という書き出しの方が流れとしては好ましいと思います。）不定冠詞を伴うということはすなわち、情報伝達の過程で不特定だということです。日本語では、原則として「不特定」の情報に対する助詞として「は」ではなく「が」を使いますので、上記のような訳になります。

日本語の正しい使い方を記した文献では、昔話「桃太郎」の書き出しを引用して「不特定」と「特定」を説明しているものがあります。「昔々あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に…」というお馴染みのフレーズです。ここからも分かるように、情報の受け取り側にとって初出の「おじいさんとおばあさん」には助詞の「が」を使い、発信側と受け取り側の両方にとって既知になった2度目は「は」になります。英語であれば、最初のおじいさんとおばあさんは不定冠詞、次は定冠詞ですね。例をいくつか見てみましょう。

A boy is playing with a ball

少年がボールで遊んでいる

The boy (who is) playing with a ball is my son

ボールで遊んでいる少年は私の息子だ（上記の用法3の定冠詞）

The ball bounded against the wall

そのボールは壁に当たって跳ね返った（上記の用法1の定冠詞）

An agreement with the land holder is necessary to construct the building.

そのビルを建てるには地主との合意が必要だ

The most important thing is to reach an agreement

最も重要なことは合意に達することである（上記の用法4の定冠詞）

定冠詞の役割は、後ろに続く名詞を修飾するという意味で所有を示す代名詞や指示代名詞と似ています。This is a photoであれば「これは写真だ」という訳になりますし、My father is a teacherであれば「私の父は教師だ」という訳になります。いずれも、「これが写真である」「私の父が教師である」という訳にはなりませんね。もちろん、助詞の「が」「は」にはいくつか用法があり、常に不定冠詞＝「が」で定冠詞＝「は」になるとは限りませんが、上記の規則は非常に多くの場合に当てはまります。たとえば次の和文を英語にしてみてください。

キリンは首が長い

国立動物園でキリンの子供が生まれた

私はネコが好きだ

ネコが我が家に迷い込んできた

その国は気温が高い

少々極端な例ではありますが、上記の文で「は」の前に不定冠詞を伴う単数

名詞が置かれることはありません。たかが助詞、されど助詞です。上記のAn output terminal is connected to the pinを安易に「出力端子はそのピンに接続されている」と訳さないように気をつけるくらいの配慮は、ぜひ持って頂ければと思います。

《参考文献》(ABC順)

- ・ 阿部 一.1998.「名詞の個を考える—冠詞と数」『ダイナミック英文法』.東京：研究社出版.p24—p35.
- ・ 相沢佳子.1999.『英語基本動詞の豊かな世界』.東京：開拓社
- ・ 秋山登志之.1995.『冠詞のミステリー』.東京：南雲堂フェニックス
- ・ (The) American Heritage Dictionary [AHD] on CD-ROM.
- ・ 安藤貞雄.1991.「関係節」『英語の論理・日本語の論理』.東京：大修館書店. p82—p84.
- ・ 荒木博之.1994.『日本語が見えると英語も見える』.東京：中央公論社
- ・ 荒木一雄.1986.「名詞・名詞句」『英語正誤辞典』.東京：研究社出版. p1—p113.
- ・ Azar, Betty Schramper. 1989. *Understanding and Using English Grammar*. New Jersey: Prentice Hall Regents. 小田眞幸 (訳) 1997.『エイザーのわかって使える英文法』.東京：プレントゥスホール出版.
- ・ アラン＝ブレンダー. 2001.『チャートでわかるa とanと the』 東京：講談社インターナショナル.
- ・ アラン＝ヘッドブルーム・鈴木俊夫.1998.『ネイティヴに近づく英語』 東京：丸善.

- ・ Berry, Roger. 1993. *Articles (Collins COBUILD English Guides 3)*. London: HarperCollins Publishers.

(重要な文献)

- ・ Biber, Douglas et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Essex: Pearson. (練習ブック)
- ・ Blender, Alan S. 1989. *Three Little Words A, An, The*. 東京：マグロウヒル出版.
- ・ Bloor, Thomas and Meriel Bloor. 1995. *The Functional Analysis of English—A Halliday Approach*. New York: Arnold.
- ・ ボブ＝ヤルポンスキー. 1996.「並列法の原則②共通する冠詞や前置詞など」

- 『日本人に共通する書く英語の弱点』. 東京：ジャパン タイムズ. p61-63.
- ・ Bryant, Margaret M. and 桃沢 力. 1990. "Adjectival Clause." *Modern English Syntax*. 東京：成美堂.
 - ・ Celce-Murcia, Marianne and Diane Larsen-Freeman. 1999. *The Grammar Book, An ESL/EFL Teacher's Course*, 2nd ed. Boston: Heinle & Heinle Publishers.
 - ・ 智原哲郎・濱本秀樹・寺秀幸・石田秀雄. 1995. 『ENGLISH ENERGIZER (英文構成の基本—理論から実践へ)』. 東京：北星堂書店.
 - ・ Claire, Elizabeth. 1988. *Three Little Words: A, An, and The*. Illinois: Delta Systems.
 - ・ Cole, Tom. 2000. *The Article Book*, Revised ed. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
 - ・ Collins COBUILD English Dictionary for Advanced Learners on CD-ROM.
 - ・ Concise Oxford Dictionary (Oxford University Press) on CD-ROM.
 - ・ デニス＝キーン・松浪 有. 1995. "A" and "The." *Problems in English-An Approach to the Real Life*, 26th impression. 東京：研究社出版. p19-p37.
(重要な文献. ネイティブ・スピーカーの観点からの的確な示唆に富む)
 - ・ DIXIE＝らんど. 1996. 『学校英語に異議あり』. 東京：国際語学社.
(辛口な内容で権威におもねない記述に信憑性が感じられる)
 - ・ 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説 改訂3版』. 東京：金子書房.
 - ・ T.J.Fitikides. 1963. *Common Mistakes in English*. London: Longman.
 - ・ 藤枝善之. 1999. 「冠詞と集合」. (大学英語教育学会 英語辞書研究会ワークショップ発表時のハンドアウト資料.)
(冠詞の研究を趣味とされている文献, 「集合」の概念を折りこんでおられる好文献)
 - ・ 福地 肇. 1996. 「関係詞と潜伏命題」『英語らしい表現と英文法 第2刷』. p25-p48. 東京：研究社出版.
 - ・ ジーニアス英和大辞典 (大修館書店) on CD-ROM.
 - ・ ジーニアス英和・和英辞典 (大修館書店) on CD-ROM.
 - ・ ジェフリー＝リーチ. 田中春美・樋口時弘 (共訳) 1997. 「aまたはan」. 「articles」. 「relative clause」. 「the」. 「zero article」. 『ネイティブ英語運用辞典』. 東京：マクミラン ランゲージハウス. p1-p4; p63-p65; p565-p570; pp640-p644; p772-p776.
 - ・ Greenbaum, Sidney and Randolph Quirk. 1990. "Postmodification." *A Student's*

- Grammar of the English Language*. p366-p377. London: Longman. (池上嘉彦・米山三明・西村義樹・松本 曜・友澤宏隆 (訳). 1995.『現代英語文法 大学編』. 東京: 紀伊国屋書店. p656-p684.)
- ・ グレン＝サリバン. 1993.『「日本人英語」のすすめ』. 東京: 講談社.
 - ・ Halliday, M.A.K. 1985. *An Introduction to Functional Grammar*, 2nd ed. London: Edward Arnold. (山口 登・笈 壽雄 (訳). 2001.『機能文法概説』. 東京: くろしお出版.)
- (冠詞を含めた決定詞全般にわたって照応関係を詳述)
- ・ Halliday, M.A.K. and Ruqaiya Hasan. 1976. *Cohesion In English*, New York: Longman. (照応関連についての調べるのに参考になる)
 - ・ M.A.K. ハリーデー ・ R. ハッサン. 笈 壽雄 (訳). 1991.『機能文法のすすめ』. 東京: 大修館書店.
 - ・ 萩野俊哉. 1998.「冠詞」『ライティングのための英文法』. 東京: 大修館書店. p57-p69.
 - ・ 萩原文彦. 1999. *Yokohama Current English Club Bulletin*, 第36巻第6-7号.
 - ・ 原田豊太郎. 2000.『技術英語の冠詞活用入門』. 東京: 日刊工業新聞社.
 - ・ 長谷川瑞穂・木全睦子. 1999. *English Grammar Today*. 東京: 朝日出版.
 - ・ 樋口 昌幸. マイケル＝ゴーマン (協力). 2003.『現代英語冠詞事典』 東京: 大修館書店.
 - ・ 日木 満. 1999.「英語冠詞の異文化性の正体—名前のないカテゴリー—」『国際文化学への招待』. pp85-100. 東京: 新評論.
 - ・ 市川繁治郎 (代表編集). 1996.『CD-ROM版 新編 英和活用大辞典』. 東京: 研究社出版.
 - ・ 五十嵐純一. 1993.「文化的側面からの英語の冠詞考」『実用英語の世界—篠田義明教授還暦記念論文集』. 東京: 南雲堂. p93-p103.
 - ・ 池上嘉彦. 1991.『<英文法>を考える』. 東京: 筑摩書房.
 - ・ 池上嘉彦. 2001.『「日本語論」への招待 第二刷』. 東京: 講談社. p93-p133; p237-p307.
(「ハ」「ガ」についても参考になる)
 - ・ 池内正幸. 1985.『名詞句の限定表現』. 東京: 大修館書店.
 - ・ 井上一馬. 2001.『冠詞がわからないと英語は話せない』. 東京: PHP研究所.

- ・井上一馬. 2002. 「冠詞の感覚」『時事英語研究, April 2002』. 東京: PHP研究所. p6-p12.
- ・井上義昌編. 1985. 『英文法辞典 (縮刷第13版)』. 東京: 開拓社. p137.
- ・伊藤, ケリー. 1999. 『耳でわかる英文法 ③冠詞』. (CDブック) 東京: 研究社出版.
- ・石橋幸太郎 (編者代表). 1989. 『クエスチョン・ボックス シリーズ 第3巻 冠詞 第19版』. 東京: 大修館書店.

- ・石田秀雄. 2002. 『英語冠詞講義』. 東京: 大修館書店.
(新知見に富む良書)
- ・一色マサ子. 1954. 『冠詞』. 東京: 研究社出版.
- ・石津ジュディス・星加和美. 2001. 『冠詞が使えるルールブック』. 東京: ベレ出版.
- ・岩垣守彦. 1993. 「時間の流れにそうー等位接続詞とコンマつき関係代名詞」「節を作って述べる一節の種類とコンマなし関係代名詞」『英語の言語感覚』. p315-p328. 東京: 玉川大学出版部.

- ・ジャン＝マケレーブ. 1998. 「冠詞の気持ち・名詞の気持ち」『ネイティブ感覚の英文法』. 東京: 朝日出版. p29-p44.
- ・ジャン＝プレゲنز. 1999. 「名詞の飾り方」『「英語の頭」をつくる本』. 東京: インターメディカル. p131-p141.
- ・ジェームズ＝キング. 1991. 『ジム・キングのひとくち英語』. 東京: 大修館書店. p62-p69.
- ・ジェームズ＝T＝キーティング. 2001. 『ネイティブチェックが自分でできる英語正誤用例辞典』. 東京: ジャパンタイムズ.
- ・ジェイムズH.M.ウェブ. 1997. 「冠詞に関する間違い」『日本人に共通する英語のミス 改訂新版 第23刷』. 東京: ジャパンタイムズ. p9-p16.
- ・ジョン＝イゾー. 村上隆則 (訳). 2001. 「冠詞の使い方」『英文テクニカルライティング』. 東京: マクミランランゲージハウス. p171-p180.

- ・金井公平・他. 1994. 『オーソドックス英文法』. 東京: 弓プレス.
- ・金口儀明. 1970. 『英語冠詞活用辞典』. 東京: 大修館書店.

- ・金谷 憲編著. 2002. 『くわしい英文法 中学1～3年 (新学習指導要領準拠)』. 東京: 文英堂. p21. (英語の情報flowを下流側から上流側をみて説明している)
- ・金谷 憲編著. 2002. 『くわしい英文法 中学1年 (新学習指導要領準拠)』. 東京: 文英堂.

- ・ 金谷 憲編著. 2002.『くわしい英文法 中学2年 (新学習指導要領準拠)』.東京：文英堂.
- ・ 金谷 憲編著. 2002.『くわしい英文法 中学3年 (新学習指導要領準拠)』.東京：文英堂.

- ・ 河上道生. 1996.「冠詞 (の誤用)」『英語参考書の誤りとその原因をつく—「英語参考書の誤りを正す」改訂増補版4版』.東京：大修館書店. p238-p255.
- ・ 神崎高明. 1994.『日英語代名詞の研究』.東京：研究社出版.
- ・ 金徳多恵子. 2000.「関係代名詞に注意する」『英文コミュニケーション作法』.東京：南雲堂フェニックス. pp80-83.
- ・ 久野 暲. 1978.『談話の文法』.東京：大修館書店.
- ・ 熊山晶久. 1985.『用例中心 英語冠詞用法辞典』.東京：大修館書店.
- ・ 黒田和雄・Vincent Canty. 1986.『英語は冠詞で完成する』.東京：リーベル出版.
- ・ 黒川泰男. 1998.「冠詞事始め」『英文法を磨く—スクールグラマーを超えて』. p72-p77. 東京：三友社出版.
- ・ 小林 薫. 1999.『英語通訳の勘どころ』.東京：丸善.
- ・ 小泉賢吉郎. 1989.『英語のなかの複数と冠詞—日本人は本当に英語を理解しているか』.東京：ジャパンタイムズ.
- ・ 小島義郎. 1994.「「定冠詞+名詞」という形の代用形」『日本語の意味 英語の意味』.東京：南雲堂. p158-p160.

- ・ Longman Dictionary of Contemporary English [LDOCE] on CD-ROM.
- ・ Longman Advanced American Dictionary [LAAD] on CD-ROM.

- ・ Macmillan English Dictionary on CD-ROM.
- ・ マーク＝ピーターセン. 1988.『日本人の英語』.東京：岩波書店.
- ・ マーク＝ピーターセン. 1990.『続日本人の英語』.東京：岩波書店.
- ・ マーク＝ピーターセン. 1999.『英語感覚をみがく』.東京：岩波書店.
- ・ マーク＝ピーターセン. 2002.『コミュニケーション英語学』.東京：集英社インターナショナル.
- ・ マーク＝ピーターセン・T.D.ミントン.「日本人の英語を斬る！」『English Journal, April 2003』 2003. 東京：アルク. pp 71-74.

- ・ 松井力也. 1999.『「英文法」を疑う』.東京：講談社.
- ・ 松浪 有 (編). 1988.「形容詞節」『英文法』.東京：大修館書店. p73-p78.
- ・ 松本 亨. 2002.『松本 亨 英作全集第6巻 冠詞編 第19版』.東京：英友社.

- ・ 松本 亨. 2002. 「単数・複数・冠詞・時制を克服する秘訣」『英語で考えるには—そのヒケツと練習 第33版』. 東京：英友社. pp72-106.
- ・ 松本 亨. 2001. 「数・時制・冠詞を超越するコツ」『英語で考える本 第24版』. 東京：英友社. pp226-248. (練習問題が主, とくに慣用表現)

- ・ McCloskey, Deirdre N. 2000. *Economical Writing*, 2nd ed. Illinois: Prospect Heights.
- ・ Merriam-Webster's Collegiate Dictionary on CD-ROM.
- ・ (T. D.) ミントン. 安武内ひろし (訳). 1999. 『日本人の英文法』. 東京：研究社出版.
- ・ (T. D.) ミントン. 青木義巳 (訳). 2002. 『続 日本人の英文法』. 東京：研究社出版.
- ・ 水野光晴. 2000. 『中間言語分析—英語冠詞習得の軌跡』 東京：開拓社.
- ・ 村田勇三郎. 1986. 「冠詞用法のthis」『機能英文法』. 東京：大修館書店. p340-p344.
- ・ 毛利可信. 1987. 「体系文法」『橋渡し英文法』. 東京：大修館書店. p128-139.
- ・ 毛利可信. 1992. 「関係詞」『新自修英作文 第29刷』. 東京：研究社出版. p98-104.
- ・ Murphy, Raymond. 1994. *English Grammar In Use*, 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.

- ・ 中川信雄. 1996. 「冠詞」『英文法がわからない!?』. 東京：研究社出版. p127-p131.
- ・ 中川信雄. 1998. 「前と後ろの関係詞？」『英文法がつうじない!?』. 東京：研究社出版. p87-p91.
- ・ 中川信雄. 2002. 「theがつくか, つかないか」『英文法その微妙な違いがわからない!? 第4刷』. 東京：研究社出版. p38-p44.
(やや初歩的な内容)
- ・ 中原道喜. 1997. 「冠詞」『マスター英文法』. 東京：吾妻書房. p207-p223.
- ・ 中尾清明. 1991. 「冠詞の誤用」『英文表現の基本と実際』. 東京：研究社出版. p59-p61; p81-p90.
- ・ 中山千佐子. 2002. 「〈風邪〉は数えられるけど〈インフルエンザ〉は？」『The Daily Yomiuri (3-1-2002. p21.)』. 読売新聞社英字新聞部.
- ・ 納谷友一. 1995. 『楽しく学べる中学英語 第87刷』. 東京：日栄社.
- ・ 西田 透. 1992. 『英語は冠詞だ』. 福岡：石風社.
- ・ 西田 透. 2000. 『英語は冠詞だ』. 東京：開拓社.
(示唆に富む好書)

- ・ 西村 肇. 1995. 『サバイバル英語のすすめ』. 東京：筑摩書房.
- ・ 西村喜久. 1997. 『これがaとtheの謎の正体だ』. 東京：明日香出版.

- ・ 織田 稔. 1982. 『存在の形態と確認—英語冠詞の研究』. 東京：風間書房.
- ・ 織田 稔. 1994. 『直示と記述同定—英語固有名の研究』. 東京：風間書房.
- ・ 織田 稔. 1990. 『英文法学習の基礎』. 東京：研究社出版.
- ・ 織田 稔. 2000. 『ことばの研究と英語教育』. 大阪：関西大学出版部.
- ・ 織田 稔. 2002. 『英語冠詞の世界』. 東京：研究社出版. (1982年の大著の内容＋その後のご研究の成果，非常に良心的な好著)

- ・ 織田 稔. 2003. 「文の構造，頭の構造」『英語青年（2003年1月）』. 東京：研究社出版. p19.
- ・ 織田 稔. 2003. 「冠詞から名詞を見る」『英語教育（2003年8月）』. 東京：大修館書店. p47-p49.

- ・ 大西泰斗. 2003. 『英文法をこわす—感覚による再構築（帯：theは「一つに決まる」ときに使われる）第2刷』. 東京：日本放送出版協会. pp183-209.
- ・ 大野 晋. 1999. 『日本語練習帳』. 東京：岩波書店.
- ・ 大島 眞. 1992. 『談話文法研究』. 東京：リーベル出版.
- ・ 大島 眞. 1997. 『日英両語の談話分析』. 東京：リーベル出版.
- ・ オレステ=ヴァカーリ. 1996. 『英文法通論—英語会話文典—第46版第17刷』. 東京：丸善. pp1-4, pp259-280.
- ・ Oxford Advanced Learner's Dictionary [OALD] on CD-ROM.

- ・ ピーター=ミルワード. 林 久男 (訳). 1981 『ミルワード氏の英文法』. 東京：研究社出版.
- ・ ポール=マクベイ・大西泰斗. 1995. 『ネイティブ・スピーカーの英文法』. 東京：研究社出版.

- ・ ランダムハウス英語辞典（小学館）on CD-ROM.
- ・ Random House Webster's Unabridged Dictionary on CD-ROM.
- ・ ランガーメール編集部. 1996. 『THEがよくわかる本』. 取手：ランガーメール.
- ・ ランガーメール編集部. 2003. 『aとtheの物語』. 取手：ランガーメール.
- ・ リーダーズ英和辞典（研究社）on CD-ROM.
- ・ 林 語堂. 山田和男 (訳). 1989. 『開明英文文法 第15刷』. p224-p234. 東京：文建書房. (日本の旧来の章立てと異なるアプローチが参考になる)

- ・ ロジャー＝パルバース・上杉隼人. 2001. 『ほんとうの英語がわかる—51の処方箋—』. 東京：新潮社.
- ・ ロジャー＝パルバース・上杉隼人. 2002. 『新ほんとうの英語がわかる』. 東京：新潮社.
- ・ ロジャー＝パルバース・上杉隼人. 2003. 『ほんとうの英会話がわかる』. 東京：新潮社. (示唆に富む良書)
- ・ 斎藤早苗. 2002. 「“a” という間に時過ぎて」『The Daily Yomiuri (3-15-2002. p15.)』. 東京：読売新聞社英字新聞部.
- ・ 斎藤秀三郎. 松田福松 (訳編). 1953. 『冠詞用法詳解』. 東京：吾妻書房.
(ポイントをついた説明がよい)

- ・ 佐久間 治. 1996. 『英語の不思議再発見』. 東京：筑摩書房.
- ・ 佐久間治. 1998. 『英語に強くなる多義語二〇〇』. 東京：筑摩書房.
- ・ 笹井常三. 1995. 「冠詞」. 「不可算名詞を量的に表現する」『英文ライティング・ハンドブック 第7刷』. 東京：研究社出版. p29-p40.
- ・ 笹井常三. 1999. 「名詞・名詞句をつくろう」. 「不可算名詞を量的に表現する」『英語のスタイルブック』. 東京：研究社出版. p136-p140; p140-p147.
- ・ 佐藤紘彰. 1993. 『アメリカ翻訳武者修行』. 東京：丸善.
- ・ 佐藤紘彰. 1996. 『訳せないもの』. 東京：サイマル出版会.
- ・ 佐々木高政. 1993. 「文と文のつなぎ方とそのつづめ方—“Relative Pronoun”で」『英文構成法 五訂新版第115刷』. 東京：金子書房. p285-p300.
- ・ Schmid, Hans-Jürg. 2000. *English Abstract Nouns as Conceptual Shells: from Corpus to Cognition*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- ・ 関口存男. 2000. 『関口存男著作集 ドイツ語学編11 (文法シリーズ7 ドイツ語冠詞, 他)』. 東京：三修社.

- ・ 清水建二. 2000. 『英文法日本人が繰り返す200の間違い』. 東京：ベレ出版. p84-86.
- ・ 清水義次. 1999. 『英字新聞を読む』. 東京：丸善. (「英字新聞のタイトルではtheはできるだけ省く」を実例によって紹介している)

- ・ 志村史夫. 1995. 『理科系の英語』. 東京：丸善.
- ・ 篠田義明. 1971. 「冠詞について」『工業技術英語の手引き』. 東京：日本経済新聞社. pp35-38.
- ・ 篠田義明. 1989. 『技術英語の常識』. 東京：ジャパン タイムズ. pp73-82.
- ・ 正保富三. 1996. 『英語の冠詞がわかる本』. 東京：研究社出版.
- ・ 新グローバル&ニューセンチュリー英和・和英辞典 (三省堂) on CD-ROM.

- ・新英和・和英中辞典（研究社）on CD-ROM.
- ・Sinclair, John (editor-in-chief). 1992. *Collins COBUILD English Grammar*. London: HarperCollins Publishers.

- ・杉本豊久. 1995. 「英語教科書作成の立場から」『現代英語研究（1995年6月）』. 東京：研究社出版.
- ・鈴木英次・鈴木喜隆・金森憲雄・桜井寛・渡辺治夫・野本健雄. 1994. 「冠詞のつけ方」『科学英語 第2刷』. 京都：化学同人. pp36-43.
- ・鈴木英次. 1999. 「確率で表す冠詞の使い方」『科学英語のセンスを磨く（帯：あなたの冠詞の使い方，大丈夫!？）』. 京都：化学同人. pp27-50.
- ・鈴木寛次. 1997. 『発想転換の英文法』. 東京：丸善.
- ・鈴木寛次. 2000. 『英文法の仕組みを解く』. 東京：日本放送協会. p155.
- ・鈴木寛次. 2000. 『こんな英語ありますか？』. 東京：平凡社.
- ・Swan, Michael. 1995. *Practical English Usage*, 2nd ed. Oxford: Oxford University Press. (吉田正治 (訳). 2000. 『オックスフォード実例現代英語用法辞典 改訂最新版』 東京：研究社出版/オックスフォード大学出版局.)

- ・田部 滋. 1996. 「定冠詞の統語上の役割」『英語習得論のなかの英文法有標性研究』. 東京：リーベル出版. p127-p144.

- ・高見健一. 2003. 「冠詞の表わす意味(1)—anと無冠詞」『英語教育 April2003』. 東京：大修館書店. pp45-47.
- ・高見健一. 2003. 「冠詞の表わす意味(2)—theの意味機能」『英語教育 April2003』. 東京：大修館書店. pp60-62.
(織田 (2003) と石田 (2002) の内容を紹介)

- ・多賀敏行. 1996. 「心のこもらない定冠詞the」『ワンランクアップの英文法』. 東京：筑摩書房. pp104-106.
- ・多岐川恵理. 1999. 『関係代名詞を使った英会話』. 東京：明日香出版.
- ・滝沢秀男. 1999. 「英文法の謎解き—その本質を探る 冠詞」『英語教育, March 1999』. 東京：大修館書店. p42-p43.
- ・滝沢秀男. 1999. 「英文法の謎解き—その本質を探る 無冠詞」『英語教育, April 1999』. 東京：大修館書店. p42-p43.
- ・高見健一. 1997. 「名詞句の同定化」『機能的構文論による日英語比較 第3刷』. 東京：くろしお出版. p175-p181.
- ・武田 康・L.B. ヒューズ. 1971. 「冠詞の使い方」『英文練達法』. 東京：日本経済新聞社. p68-p125.

- ・ 武田修一. 1998. 『英語意味論の諸相』. 東京：リーベル出版.
- ・ 田中茂範. 1993. 『発想の英文法』. 東京：アルク.

- ・ 寺澤芳雄 (編). 2002. 『英語学要語辞典』. 東京：研究社. p46-p47.
- ・ Thomson. A. J., Martinet A. V. 1986. *A Practical English Grammar*, 4th ed. Oxford: Oxford University Press. (江川泰一郎訳. 1988. 『第4版 実例英文法』. 東京：オックスフォード大学出版局.)
- ・ 外山滋比古. 1992. 「“of” と「の」の関係」『英語の発想・日本語の発想』. p62-p65. 東京：日本放送出版協会.
- ・ 豊田昌倫. 1993. 『英語表現をみがく』. 東京：講談社.
- ・ 辻谷真一郎. 2002. 『学校英語よ, さようなら』. 東京：文芸社.

- ・ 上田明子. 1997. 『英語の発想』. 東京：岩波書店.
- ・ ヴァネッサ＝ハーディ. 加藤恭子 (編訳). 1993. 『英語の世界 米語の世界』 東京：講談社.

- ・ 渡辺登士 (編著代表). 1989. 『続 クエスチョン・ボックス シリーズ 第17巻 冠詞・形容詞・副詞 第5版』. 東京：大修館書店.
- ・ Watkins, Gareth・小林 功. 2002. 「総称用法のaとtheについて」『英語教育, November 2002』. 東京：大修館書店. p73-p74.

- ・ 八木克正. 1999. 『英語の文法と語法』. 東京：研究社出版.
- ・ 八木克正. 1996. 『ネイティブの直観にせまる語法研究』. 東京：研究社出版.
(示唆に富む良書)

- ・ 山口昌彦. 1991. 「冠詞」. 「関係詞」. 「不定冠詞」. 「定冠詞」. 「無冠詞」. 『英語・英文法重要用語辞典』. 東京：南雲堂フェニックス. p56-58; p46-p56; p198-p200; p297-p299; p334-p337.
- ・ 山口俊治. 2002. 『英文法』. 東京：語学春秋社. p344-p352.

- ・ 吉田正治. 1995. 『英語教師のための英文法』. 東京：研究社出版.
- ・ 吉田正治. 1998. 『続 英語教師のための英文法』. 東京：研究社出版.
(示唆に富む良書)

- ・ 四宮 萬. 1999. 『英語の発想と表現』. 東京：丸善.

《参考websites》 [http: //]の部分は省略.

- ・アルク社.『冠詞：定冠詞，不定冠詞，無冠詞の場合など』.(www.alc.co.jp/eng/grammar/faq/2.html)
 - ・ASU Writing Center. 2000. *How to Use Articles*. (www.asu.edu/duas/wcenter/articles.html)
 - ・英語雑貨屋. 2003. 「英語独学室：BREAK THOROUGH 英語のカベを打ち破る— No. 1 冠詞」 www.inr.co.jp/zakkaya/brk/art.htm)
 - ・藤本正文. 2002. 「冠詞」『研究報告 く英文リーディング基本単語の研究：英和辞典からのステップ>リーベル出版. 2001』. (www.toyama-mpu.ac.jp/la/english1/index-j.html)
 - ・ひでろう（投稿者）. 2000. 『冠詞の使い方. なんで?』. (www.ymd.com/forum/toefl/messages/2301.html)
 - ・Iioka, Nobuyuki. 2000. 『冠詞について』. (homepage2.nifty.com/multilingual/18.htm)
 - ・Indiana State University. 1999. Resources For Writers. (isu.indstate.edu/writing)
 - ・板垣秀和. 2000. 「ATELAS (Association of Teachers for English Language Advancement in Schools) 第26回研究会 く冠詞について> 参加レポート.」『ATELAS NEWSLETTER No.5,2000.』(www.uranus.dti.ne.jp/~ita-chan/Newsletter/Newsletter5.htm)
 - ・伊藤サム. 2002. 「冠詞の秘密 2」『英字新聞見出しのルール』. (English.evidus.com/mag/eiji/back.html)
 - ・工藤教孝. 2002. 「英語学習」『工藤教孝ホームページ』. (www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~kudoh)
 - ・KUMA Akira. 2002. 「冠詞について」「関係代名詞の非制限的用法について」『英語教育に関する覚え書き』. (nakamanman.f2g.net/efl/index.html)
 - ・松村武明. 掲載年不詳. 『続・英語の勉強』. (www.h.do-up.com/home/ja4bjo/petersen.htm)
 - ・Mizuno Asako. 2002. 「翻訳さんぽみち：冠詞の理解の仕方，使い方」『Patent Translation World』. (monjunet.ne.jp/PT/sampo)
- (しっかりした内容で好感がもてる)
- ・Mizuno Asako. 2002. 「国際特許務所：冠詞あなどるなかれ」『Patent Translation World』. (monjunet.ne.jp/PT/attorney)
 - ・名古屋大学情報メディア教育センター. 2002. 「Frog Storyにおける英語母語話者と学習者の比較」(www.media.nagoya-u.ac.jp/people/m010316/frog/compare.txt)

- ・名古屋市立大学第2外科学教室.『英文論文の書き方』.([www. med. Nagoya-cu. ac.jp/surg2.dir/contents/topi/ronbun.html](http://www.med.Nagoya-cu.ac.jp/surg2.dir/contents/topi/ronbun.html))
- ・大山研司. 2002.「英語論文での冠詞の使い方」『科学論文に役立つ英語』.
([homepage. mac. com / imr_mercury / ohyama / index.html](http://homepage.mac.com/imr_mercury/ohyama/index.html))
(しっかりした内容で好感がもてる)
- ・Paquette, Glenn. 1999. “Use of Articles.” *Notes on English Composition* (日本人のための英語論文講座). Progress of Theoretical Physics誌.
- ・Purdue University. 1999. The Purdue University Writing Lab on the Web. ([owl. english. purdue. edu.](http://owl.english.purdue.edu/))
- ・Shakes. 1997.『冠詞について』.([www. fitweb. or. jp / ~shakes / index043.html](http://www.fitweb.or.jp/~shakes/index043.html))
- ・染谷泰正. 1998.『Online Version 英文ビジネス文書完全マニュアル』.
([someya1. hp. infoseek. co. jp / index.html](http://someya1.hp.infoseek.co.jp/index.html))
- ・高橋茅香子.「翻訳が一番：第3回 冠詞は恋する目ほどモノをいう」『今日という一日』([www. bzbz. org/chikako/trans/03.html](http://www.bzbz.org/chikako/trans/03.html))
- ・東京医科歯科大学. 2002.『冠詞の有無』.([www. tmd. ac. jp/med/phy1/ grammar /article.html](http://www.tmd.ac.jp/med/phy1/grammar/article.html))
- ・執筆者不詳. 2003.『英語教師の基礎知識』.([www. d1. dion. ne. jp/~kazu1126/ index.htm](http://www.d1.dion.ne.jp/~kazu1126/index.htm))
- ・執筆者不詳. 2003.『index of/kanshi』.([vibrato. plala. jp / kanshi](http://vibrato.plala.jp/kanshi))
- ・執筆者不詳. 1999.『Index of/~e-fumi/StudyEng: 冠詞』([www2u. biglobe. ne. jp / ~e-fumi / StudyEng / article.htm](http://www2u.biglobe.ne.jp/~e-fumi/StudyEng/article.htm))
- ・執筆者・掲載年不詳.『英語の冠詞』.([thebbs. jp / language / 1025847166.html](http://thebbs.jp/language/1025847166.html))
- ・執筆者・掲載年不詳.「後置修飾と冠詞」『英語舎』.
([www. d3. dion. ne. jp/ ~katsurag/eigode-1. htm](http://www.d3.dion.ne.jp/~katsurag/eigode-1.htm))